

同一性地位における自伝的記憶の働き III

内容による分析

○西園 薫 無藤 隆

(お茶の水女子大学)

【問題】

同一性達成の過程において、過去が再検討され、統合されるといふ(Erikson, E. H., 1950)。では、具体的にどのような形で、青年期の自己定義に過去の経験が利用されるのだろうか。先行研究(西園, 1990a, 1990b)より、達成群は非達成群と比べ、直接的な経験ではなく、現在の命題に合った、再構成された過去を示すとの結果が得られた。これを踏まえ、本研究では、内容分析より、同一性形成の過程を具体的に検討する。

分析項目は、想起された対象、それに対する心理的反応、どのように意味づけられたかである。

Zirkel and Cantor(1990)によると、発達段階において、それぞれ“Life Task”(人がある時期に関心をもつ意識的に想定したゴール)が存在し、そのゴールにむけ、自己が投入されるという働きが考えられる。青年期において、「自立」が主要なLife Taskとなるが、特に、Life Taskに関心を持つ群において、課題に向けて、自己を具体的に投企したり、過去や未来から現在を捉えるという傾向が認められた。これを踏まえて、本研究では、現在より過去をどのように捉えているか「意味づけ」という点から、達成群の特徴を検討する。

【仮説】

達成群は非達成群と比較して、「意味づけ」の出現頻度が高く、多種類生じるだろう。これは、達成群が同一性達成の過程を経たことによると仮定する。

【方法(面接研究)】

(1)大学生45名を対象に、同一性地位面接(<職業><価値観>の2分野)を実施。

(2)(1)の一週間後、面接で用いた質問より、次の6項目について、どういうところからそう考えるようになったのか、きっかけについて具体的に思い出せるかどうか尋ねた(①大学選択②専攻選択③将来の希望④尊敬する人・影響を受けた人⑤生きていく上で大切に考えること⑥よいと考える基準)。

【分析】

(1)同一性地位について質問項目より地位を決定した。

(2)「きっかけ」として述べられたものを「①対象」「②対象に向けられた心理的反応」「③意味づけ(その

後どのような意味づけがなされたか)の3つの部分に分け、出現の有無とその分類を行なった。

① 想起された対象の分類

家族(親・特定のひとり・家族全体)、先生/先輩、友人(特定のひとり・クラス/サークル・周囲・異性)、授業/本/テレビなど、考えたこと、自然に

② ①に対する心理的反応の有無と分類

肯定的(尊敬・感動・感銘・希望・楽しい・好き・面白い等)、中立的(興味・考えて・影響)、否定的(否定・嫌悪・いじめ・反面教師・理解のなさ・別離)

③ ①②に対する意味づけの有無と分類

発展;想起された事象より発展させて結論を得る
経緯;想起される事象の経緯を意味づけて語る

【同一性地位の決定】

<職業>達成群 9名、モトリウム群 19名、

早期完了群 15名、拡散群 2名

<価値観>達成群 14名、モトリウム群 3名

早期完了群 26名、拡散群 2名

※なお、拡散群と<価値観>のモトリウム群は少数であったので、②心理的反応と③意味づけの分析より省いた。

【結果】

① 想起された対象

群ごとに、 χ^2 検定を行なったところ群差は認められなかった。設問により、きっかけとされた対象の種類の出現度に差が認められた。想起された対象は、家族・特定の友人・先生などの「人との関わり」、クラブ活動やクラスなど「集団での関わり」、本・テレビ・授業での内容などの「事物との関わり」、およびその他である。具体的対象ではなく、「考えた記憶」という抽象的な対象も多く示された。特に「②将来の希望(30.2%)」「⑤生きていく上で大切だと思うこと(34.9%)」で生じている。

② 心理的反応

反応数について、 χ^2 検定を行なったところ、表1-1・1-2に示すように、「⑤生きていく上で大切なこと($p<.01$)」と「⑥よいと思う基準($p<.05$)」で、達成群が早期完了群より有意に多いという結果が得られた。

種類について、群差は認められなかった。

③ 意味づけ

反応数について、 χ^2 検定を行なったところ、表2-1・2-2に示すように、「②専攻選択」で、達成群がモトリ7A群と早期完了群より有意に多く(p<.05)、「④尊敬する人(p<.01)」「⑥よいと思う基準(p<.01)」で、達成群が早期完了群より多く出現するという結果が得られた。種類について、群差は認められなかった。

【考察】

達成群と非達成群の相違について、想起された対象に差は認められなかった。心理的反応の総数について、「⑤生きていく上で大切なこと」と「⑥よいと思う基準」で、達成群が早期完了群より多く生じた。また、意味づけの総数について、「②専攻選択」で達成群がモトリ7A群と早期完了群より多く、「④尊敬する人」「⑥よいと思う基準」で、達成群が早期完了群より多く生じた。以上より、同一性達成群は、他の群と比較して、ある事象に心理的に反応し、意味づけたと認識していると考えられる。特に、<価値観>の分野において、この傾向が認められた。これは、設問の性質上、内的な思考へと向かいやすいためかもしれない。また、「②専攻選択」については、自発的に選択したか否かより差異が生じやすい設問であるためと考えられる。以上より、同一性達成の形成過程において、事象の「意味づけ」が達成群で生じるのではないかと仮定できる。

対して、早期完了群では、<価値観>で、「心理的反応」で無反応が多く出現し、「意味づけ」で無反応が過半数を越えた。つまり、早期完了群は、「きっかけ」として具体事象を示しても、その後の現在との関連づけで、達成群と異なるのではないかと仮定できる。

モトリ7A群では、「心理的反応」の反応数と比較して、「意味づけ」の反応数が少なかった。特に「③将来」で「意味づけ」の無反応が多く生じたが、まだ職業について考慮のためと仮定できる。以上より、「意味づけ」とは、確定的な自己定義と関係があるのではないかと仮定できよう。

種類については、「心理的反応」と「意味づけ」のいずれでも、群差は出現しなかった。これは、一対一の面接という性格上、極端に肯定的なもの、否定的なものが示されなかったためかもしれない。

なお、本研究では拡散群との比較を行なっていないので、今後、4群間の比較が必要だろう。また、各群において、どのような事象が「きっかけ」と認識されているのか、代表的課題を抽出することが必要である。

表1-1 心理的反応の反応数

	② 専攻			③ 将来		
	達成 N=9	モトリ7A N=19	早期完了 N=15	達成 N=9	モトリ7A N=19	早期完了 N=15
反応	9	15	12	7	15	9
無反応	0	3	3	2	4	6
反応； 肯定的	2	3	1	0	1	2
中立的	7	12	11	7	12	7
否定的	0	0	0	0	2	0

表1-2 心理的反応の反応数

	④ 尊敬		⑤ 生きていく		⑥ よいと思う	
	達成 N=14	早期完了 N=26	達成 N=14	早期完了 N=26	達成 N=14	早期完了 N=26
反応	14	22	14**	13	13*	16
無反応	0	4	0	13	1	10
反応； 肯定的	10	13	2	0	1	0
中立的	4	9	11	12	11	14
否定的	0	0	1	1	1	2

** p<0.01 * p<0.05

表2-1 意味づけの反応数

	② 専攻			③ 将来		
	達成 N=9	モトリ7A N=19	早期完了 N=15	達成 N=9	モトリ7A N=19	早期完了 N=15
反応	8 **	11	6	5	5	7
無反応	1	8	9	4	14	8
反応； 発展	4	9	5	5	3	5
経緯	4	2	1	0	2	2

** p<0.01

表2-2 意味づけの反応数

	④ 尊敬		⑤ 生きていく		⑥ よいと思う	
	達成 N=14	早期完了 N=26	達成 N=14	早期完了 N=26	達成 N=14	早期完了 N=26
反応	14**	12	11	15	12**	8
無反応	0	14	3	11	2	18
反応； 発展	6	7	9	11	8	4
経緯	8	5	2	4	4	4

** p<0.01